

4年国語科学習指導案

1. 日 時 令和7年1月28日(火) 第5時限 (13:35~14:20)

2. 学年・組 4年〇組(在籍〇名)

3. 単元名 「日本語の教え方について考えよう」
教材(「教え方を生み出そう」 東京書籍)

4. 単元の関連と系統

前単元(6月)	本単元(11月)	次単元(1月)
理由を吟味して考えを書く 「自分なら、どちらを選ぶか」 ○理由を吟味しながら、自分の考えを書くことができる。	日本語の教え方について考えよう 「教え方を生み出そう」 ○日本語の教え方に対する筆者の考えを捉えて、自分の考えを広げることができる。	文章のよいところをたしかめる 「十年後のわたしへ」 ○十年後の自分に向けて、今の自分のことを伝える手紙を書くことができる。

5. 学習目標

- 日本語の教え方に対する筆者の考えを捉えて、自分の考えを広げることができる。
- ・考えとそれを支える理由や事例、全体と中心など情報と情報との関係について理解することができる。
- ・文章を読んで感じたことや考えたことを共有し一人一人の感じ方などに違いがあることに気づくことができる。
- ・進んで筆者の考えから自分の考えを広げ、学習の見通しを持って、まとめたことを伝えることができる。

6. 評価規準

知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	主体的に学習に取り組む態度
・考えとそれを支える理由や事例、全体と中心など情報と情報との関係について理解している。	・「読むこと」において、目的を意識して、中心となる語や文を見つけて要約している。 ・「読むこと」において、文章を読んで感じたことや考えたことを共有し、一人一人の感じ方などに違いがあることに気づいている。	・進んで筆者の考えから自分の考えを広げ、学習の見通しを持って、まとめたことを伝え合おうとしている。

7. 指導にあたって

(児童観)

本学級の児童は、1年を通して、自分の考えをまとめるなど「書くこと」や「読むこと」をあきらめずに取り組んできた。年度当初はなかなか書けずに悩んだり、自分の思いをうまく伝えられなかったりがあったが、2学期後半から言葉の使い方に着目できるようになったり、文章をたくさん書けるようになったりと手応えを

感じている児童が多くなってきた。一方で、自分の思いを書くことに集中するために他者の意見を聞いて自分の意見を広げる活動はまだ十分できていない。

4年生で初めて学習した説明文「ヤドカリとイソギンチャク」では、段落どうしのまとまりに気をつけて要約文を原稿用紙に書くという言語活動を設定した。「始め」は、心に残った文や大切だと思う文を引用すること、「中」は事例を要約すること、「おわり」は感想を書くこととした。また、まとまりに気を付けて書くことから段落を3つ以上作ることとした。書き方がある程度説明してから原稿用紙に書いたが、複数の児童が「要約の仕方が全くわからない」と言っていた。また、引用する文が長すぎたり、重要語句を見つけられなかったりした。評価テストの結果では、筆者の主張の読取りが曖昧なことがわかった。そのため、国語科に留まらず、社会科や算数科でも重要な語句や文になるべく短い線を引くという学習を繰り返すようにした。

2学期に学習した「くらしの中の和と洋」では、和室や洋室の良さについて自分の体験や考えを入れて紹介文を書くという言語活動を設定した。筆者の主張は、文章構成表を書くことで明確になることから、本文を一文にまとめたワークシートを用いて、形式段落ごとに重要語句や文に線を短く引く学習をした。次に、選び出した重要語句や文を文章構成表にまとめ、つなぎの言葉を手立てに「始め」「中」「おわり」の大体の見当をつけた。

「中」の事例は、情報のとびらで学習した観点表を用いることでまとめることができた。紹介文に書く自分の体験や考えも事例とともに観点表で整理していたため、言語活動はスムーズにできる児童がほとんどだった。しかし、まだ紹介文を書くことで精一杯で、互いの文章を読み合うまでは至らなかった。「一番伝えたいことは何？」と聞いても曖昧な児童が数名いた。これらのことから、自分の考えを明確にすることで相手にとってもわかりやすい文章を書くこと、自分の考えを相手と共有し対話することによって、自分の考えを広げ深めることが課題であることがわかった。

(単元観)

本教材は、普段意識することなく用いている日本語の「数え方」を話題に、日本語について筆者の考察を述べたものである。文章は三部構成で書かれており、結論に筆者の主張が書かれている尾括型で、児童が今まで学習してきた説明文と同じ型である。

序論では「数え方」という話題が提示されている。本論では、(1) アメリカで日本語の勉強をしている小学生が数え方を自由に生み出す場面に出会った筆者の経験をもとにした、エンジンの数え方の違い、(2) 日本語の数え方の役割・問題点、(3) 明治や昭和の例をもとに新たに数え方が生み出されているということ、の3つについて述べている。事例は観点表を用いることで簡潔にまとめられることや、つなぎの言葉や指示語など既習事項を確認するためにも最適である。結論では、筆者が「新しい数え方を生み出してみませんか。」と呼びかけていることから、数え方について意見を交わし自分の考えを広げるための教材である。そのため、児童の課題に即した教材であるといえる。

(指導観)

本単元では、日本語の数え方について筆者の考えをもとに自分の考えを書き、みんなで共有しようという言語活動を設定した。

第I次では言語活動を確認後、初発の感想を書く。その内容は第III次で学習前と学習後で自分の主張が変わったか否かを比較するためであるという見通しを持つ(方法①)。次に、文章構成表を作成する。このとき「くらしの中の和と洋」でも活用した本文を1枚にまとめたワークシートを使用する。個人で重要な語句や文に線を引き、その後、線を引いた箇所を全体で共有する。文章構成表に、要点をできるだけ短い文や単語で記入する。文章構成表をもとに、「始め」「中」「おわり」をどのように分けるかを班で話し合う。既習事項を想起させ、つなぎの言葉や話題が変わったところに注意しながら「中」を3つに分ける。このとき、ホワイトボード

に根拠を記入しながら三部構成を考えさせる（方法③）。

第Ⅱ次では、筆者の主張の根拠となる事例について観点表を用いて整理する。事例は「中」に3つ書かれており、事例の工夫として、①逆説の接続詞のあとに筆者が強調する主張が挙げられていること、②うけつがれてきた数え方の後に新しい数え方を挙げていることがある。筆者は、うけつがれてきた数え方の事例も挙げているが、あくまで筆者が強調したい内容は題名にも書かれている「数え方を生み出そう」であることを丁寧に読み取らせる。本時は、筆者が事例を通して「新しい数え方を生み出す」ことの大切さを繰り返し主張していることを読み取り、学級全体で新しい数え方を共有することで日本語の表情の豊かさを実感し、筆者の考えを深く捉えさせる。第Ⅱ次の読み取りが第Ⅲ次につながるよう振り返りは、「筆者は～という考えだ。（つなぎの言葉）自分の考え」という型を使う（方法②）。

第Ⅲ次では、第Ⅱ次で筆者の考えを深く捉えた上で自分の考えはどう変化したかを発表ノートに書く学習をする。発表ノートは三部構成で書き、文章構成表を使う。「始め」には自分の考えを簡潔に書く。「中」は、受け継がれてきた数え方や自分が考えた新しい数え方についての事例を書く。その際は相手に伝わるような工夫（事例をいくつかあげる、観点表を用いる、挿絵を入れるなど）を取り入れて書くようにする。「おわり」では、自分が最も伝えたいことを書く。その際には本文を引用したり要約したりして自分の最も伝えたいことを端的に書くようにする（方法④）。発表ノート完成後は全員でノートを共有し、それぞれの考えや感じ方の違いに触れ、自分の考えを広げる学習をする（方法⑤）。

8. 学習指導計画（全10時間）

次	時	学習活動	指導・支援・評価
I	1	○単元の学習の見通しを持ち、初発の感想を書く。	<ul style="list-style-type: none"> ・身近にある文房具を用いて数え方の確認をし、数え方の違いに気づかせ、興味・関心を高めるようにする。 ・初発の感想は、導入後に数え方についての思いを簡単に書き、読了後に筆者の工夫や疑問に思ったこと、感想を書くようにする。 ◇ 観点に沿って初発の感想を書いている。
	2・3	<ul style="list-style-type: none"> ○形式段落を一文でまとめ、要約に使える言葉やキーワードを見つける。 ○「始め」「中」「おわり」に分け、「中」をいくつかのまとまりに分けよう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・本文を1枚にまとめたワークシートを用いて、そこにキーワードや大事な文などに線や記号を書くようにする。 ・「始め」「中」「おわり」に分ける際は、既習事項（つなぎの言葉、事例、筆者の主張など）を想起させ、「中」は3つに分けるようにする。 ◇ 文章構成表をもとに三部構成を協働して考え、内容を捉えることができる。
II	4	○中①の事例を表で整理し、筆者の考えをまとめよう。	<ul style="list-style-type: none"> ・ニンジンの数え方について、日本人とアメリカの子どもたちの数え方の表を作り、違いを見つけ出せるようにする。 ・アメリカの子どもたちは、ニンジンのほかの特徴にも注目して数え方を生み出していることを読み取り、筆者の主張の根拠の1つになっ

	5	○中②の事例を表で整理し、筆者の考えをまとめよう。	<p>ていることに気づくことができるようにする。</p> <p>◇ 事例を表に整理することができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本語の数え方の役割について知るため、本文の事例をもとに資料の「座」「膳」「棹」についても同様にまとめ、昔から伝わる日本語の数え方が様々あることに気づくようにする。 ・接続詞の「しかし」のあとが、筆者の主張であることに気づくようにする。 <p>◇ 事例を表に整理することができる。</p>
	6	○中③の事例を表で整理し、筆者の考えをまとめよう。	<ul style="list-style-type: none"> ・明治から昭和にかけて新しい数え方が生み出された事例を表にまとめ、日本語は便利で表情豊かにすることを読み取ることができるようにする。 <p>◇ 事例を表に整理することができる。</p>
	7 (本時)	○筆者の主張を活かして、新しい数え方を考えよう。	<ul style="list-style-type: none"> ・接続詞の「一方」に気づき、筆者の主張がより強調された文を読み取り、「中」の文章から根拠となる事例を見つけ出せるようにする。 ・形式段落⑧が筆者の主張をより具体的に説明している文章であることに気づき、筆者の主張を深く捉えられるようにする。 <p>◇ 自分で考えた新しい数え方について説明することができる。</p>
III	8～9	○筆者の数え方を考え、発表する準備をする。	<ul style="list-style-type: none"> ・筆者の考えを捉えた上で自分がどう考えたかをまとめ、わかりやすい言葉や挿絵を用いて相手に伝わる文章が書けているかの観点で推敲するように伝える。 <p>◇ 筆者の主張を捉えて自分の主張を書くことができる。</p>
	10	○新しい数え方を作って発表し、考えたことを伝え合う。	<ul style="list-style-type: none"> ・発表ノートを学級で共有し、自分の考えとの違いや同じところを見つけ、考えを広げられるようにする。 ・振り返りでは自分の考えを広げるきっかけになった人の意見を書き、どのように広がったかを伝えようとする。 <p>◇ 相手の話を聞いて、自分の考えを広げることができる。</p>

9. 本時の学習（7／10時間）

(1) 目標

- ・日本語の数え方に対する筆者の主張を活かして、新しい数え方を考えることができる。

(2) 展開

学習計画	指導上の留意点（指導者の指導・支援）	評価規準
1. 前時の学習を振り返り、本時の課題を確認する。	<ul style="list-style-type: none"> ・「中」に挙げられている3つの事例で筆者の考えがそれぞれ示されていたことを掲示物から振り返るようにする。 	
<p>筆者の主張を活かして、新しい数え方を生み出そう。</p>		
2. ⑪～⑫を音読する。	<ul style="list-style-type: none"> ・事例が筆者の主張とどう繋がっているかを想起しながら音読するようにする。 	
3. 筆者の主張している部分を抜き出し、事例と結び付ける。	<ul style="list-style-type: none"> ・前時から逆説の接続詞の後が筆者のより強調したい主張であることに気づき、事例と結び付けるようにする。 ・新しい数え方の事例として、アメリカの子どものエンジンの数え方（形式段落④）、明治や昭和で出てきた新たな数え方（形式段落⑨⑩）であることを読み取り、新しい数え方を生み出す方法を考えられるようにする。 	
4. 新しい数え方を考え、発表する。 個人→全体	<ul style="list-style-type: none"> ・新しい数え方の方法を参考にして、「もの」「数え方」「理由」をノートに書き、全体で共有できるようにする。 ・全体で共有することで、「特ちょうを生かした数え方をすると日本語が表情豊かになる」という本文に戻り、筆者の主張と重なることを読み取るようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・新しい数え方を考え、理由を含めて書く。
5. 言語活動を振り返り、わかりやすい文章を書くための手立てを共有する。	<ul style="list-style-type: none"> ・新しい数え方だけでは相手にその良さを伝えることができないことに気づき、中の事例を振り返り、受け継がれた数え方に触れることの重要性に気づけるようにする。 	
6. 本時の学習を振り返り、次時につなげる。	<ul style="list-style-type: none"> ・新しい数え方だけを考えるのではなく、受け継がれた数え方も調べることの大切さに気づき、次時につなげる。 ・振り返りには、筆者の考えを捉えた結果、自分は数え方をどのように捉えるかを書くことができるようにする。 	

(3) 板書計画

10. 指導を終えて (成果○と課題●)

【子どもが主体性を発揮できる授業づくり】

- 側面掲示は、事例ごとに色分けした観点表を用いて、今まで学習した内容が分かるようにし、授業でも活用できた。
- 子どもの疑問からめあて作りをした。授業でも子どもが見つけた筆者の工夫や子どもが自ら調べたことなどを授業に取り入れることで意欲的に学習に取り組むことができた。
- 観点表や文章構成表に書き込むなどの書く活動が多かったので、書く量を調整する必要があるがあった。
- 新しい数え方の観点表は「もの」「数え方」「理由」だけではなく、「特徴」を表に入れた方がよかった。
- 筆者が「新しい数え方を生み出すこと」に重きを置いていたことを、「一方」という言葉とセットで抑えた方がよかった。
- より多くの児童が授業に参加できるような発問や問いかけを工夫する必要があるがあった。
- 本文を1枚にまとめたワークシートだけを授業では使用したが、児童が教科書かワークシートかを選択できるようにしてもよかった。

【協働的に学ぶ授業づくり】

- 個人で考えた新しい数え方を全体で共有することで「日本語が表情豊かになること、ものの見方を広げることができる」という本文を実感することができた。
- めあてを考える少人数での話し合いでは、自分の考えを言うだけではなく、友だちの意見を聞いて同意したり、納得していたりする姿が見られた。
- 「考え=でん」のように思いつきにくい数え方を共有することで深い学びに繋げることができた。
- 新しい数え方を共有する時間を多めにとったため、受け継がれた数え方がなぜ必要なのかを子どもたちで十分に話し合えていなかった。そのため、一部の児童が主導の授業展開になり子どもたちの考えが広がらずに授業者主導の授業展開になってしまった。
- 交流する場は交流する場として、自分で考えたい児童も交流する場に参加するよう指導を徹底する必要があるがあった。

